

## 旅を通して 知らない文化と触れ合う

パリ、ローマ、ニューヨーク：有名な観光地というと、欧米の、いわゆる先進国の町を思い浮かべる人も多いだろう。だが、開発途上国にも訪れるべき場所はたくさんある。各国が誇る世界遺産は、その一例だ。

しかし、開発途上国の観光地の開発は、先進国から来る観光客のニーズを想定することが多く、地域振興に結び付かないケースも多い。そうした現状を受け、ユネスコに世界遺産となるべき物件を答申する国際記念物遺跡会議（ICOMOS）は、国際文化観光憲章の中で地域に根ざした観光開発の重要性を指摘し、「観光資源の開発には、資源の所有者、近隣住民、文化の継承者の三者を関与させなくてはならない」と強調している。

国連世界観光機関の調べでは、2014年の時点で観光業は全世界のGDPの9%、労働者の11人に1人を占める。それを考えれば、観光開発と住民の生活を一体的に捉えることは不可欠だ。

## 日本式「町おこし」を 世界で生かす

日本はこれまで、博物館など観光施設の建築や、遺産の保存・修

県由布院の田園的な景観などは、地元住民が自らルールを作って地域の魅力を生み出してきた例だ。昨年、世界文化遺産に指定された富岡製糸場も、地元NPOやボランティアの普及活動が高く評価された。

一方、有名になった世界遺産の中には、保存や修復のために、周辺住民を締め出してしまったものもある。「人々が連続と受け継いできた営みから切り離された遺産は、どれほど美しく修復され、公園として整備されても、文化としては死んだも同然です。今後は、地元の人々の生活の場である。生きた遺産」を後世に引き継いでいくことが重視されるでしょう」と西山教授は言う。

また、自然遺産は近隣に住む人々にとって日々の糧を得る生活の場であることも多い。自然を守るためといっても、そのために人々の生活を無視するわけにはいかない。人の生活の場としての自然や、そこにある多様性を考えたとき、日本伝統の里山のように「手入れによって保存する」という考えから得るものは多い。

## 観光化の弊害を抑え 新たな価値の創出を

一村一品運動や道の駅など、地域に根付いた形で、需要の創造や

復といったハード面、観光資源へのアクセスに必要な道路などのインフラを中心に、開発途上国を支援してきた。考古学者や学芸員などの専門家による質の高い技術移転は、現地からも高く評価されている。

「これからは、観光資源を地元社会が積極的に維持し、振興する『自律的観光』にかじを切る必要がありすが、そのヒントは国内に隠されています」と、北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明センター長（国際広報メディア・観光学院教授）は言う。

日本でも国内旅行が普及した70年代から、多くの自治体は、観光客を呼び寄せるために、町おこしに尽力した。その際、多くの自治体は地域社会の活性化と、観光客をひきつける魅力的な観光地づくりの両立を目指した。西山教授は「歴史ある町並みの保存や自然の保護、伝統を生かした土産物の考案などは、地域社会が自分たちの文化や魅力を知り、それに誇りを感じる土壌の上に、事業のビジョンがあるからできることです。日本の町おこしには、こうした点で示唆に富む多くの成功例があります」と指摘する。

世界遺産に登録された岐阜県白川郷の合掌造り集落や、沖縄県竹富島の赤い瓦屋根の町並み、大分

地元への利益還元に結び付いているビジネスモデルは、国内にいくつも存在している。こうしたビジネスモデルを開発途上国の現状に合わせて、長期的に観光開発に取り組むためには、JICAのような組織や現地政府の協力が重要となってくる。官民の枠組みを超え、現地との密接な協力を進めていくことが大切だ。

もうひとつ、観光開発で避けて通れないのが、観光振興に伴う弊害（負のインパクト）の軽減だ。これまで人に知られていなかった場所が観光客でにぎわうということは、消費活動が急に増えるということでもある。自然や遺跡の破壊を防ぐのはもちろんのこと、道路や電車などの交通機関、きれいな水やトイレ（上下水道）、観光客が残すゴミの処理など、考えなくてはならないことは山ほどある。これまでインフラの整備やゴミの削減に先進的に取り組んできた日本だからこそ、これらの問題を解決するために、開発途上国に対して提案できる協力の形があるはずだ。

もし、あなたがこの夏、旅行に出かけたら、その土地ならではの生活や文化を感じるだけでなく、そのすばらしい文化を守るためには何ができるかについても、思いをはせてみてほしい。

## 特集 観光・世界遺産

# 歴史とともに 生きていく

楽しい夏休みが始まるまで、あと少し。  
今から旅行を計画している人も多いはずだ。  
行き先は有名な観光地だろうか。  
それとも静かな保養地だろうか。  
国内か、海外か－選択肢は無尽大。  
今では私たちの生活の一部となった観光旅行。  
その裏には、観光地の人たちのたゆまぬ努力がある。

編集協力：北海道大学 観光学高等研究センター 西山徳明センター長



1 セネガル

レトバ湖

バラのようなピンク色に染まることから「ラック・ローズ」と呼ばれる。セネガルには、七つの世界遺産やビーチリゾートなど観光資源が豊富に存在する。

✈️ 首都ダカールまで、ヨーロッパ経由で約22時間

観光開発アドバイザー  
観光開発アドバイザーを派遣し、現地の担当省と共に国の観光戦略の策定と遂行、職員のスキルアップのためのワークショップなどを実施。



5 インド

アジャンタ・エローラ石窟群

膨大な仏教壁画が残るアジャンタと、仏教・ヒンドゥー教・ジャイナ教の石窟寺院が近接するエローラは、インドが誇る珠玉の世界遺産。

✈️ 最寄りのアウランガバードまで、シンガポール、ムンバイ経由で約19時間

遺跡保護・観光基盤整備事業  
石窟の概要や見所などを発信する「ビジターセンター」の建設に協力。遺跡の保護や、観光客誘致のための宣伝活動にも取り組む。



6 カンボジア

アンコール・ワット

クメール美術の真髄を体現した、アンコール遺跡群の中で最大級の規模を誇る寺院遺跡。年間約100万人の観光客が世界中から訪れる。

✈️ 最寄りのシェムリアップまで、ベトナム経由やタイ経由で約9時間

西参道修復機材整備計画  
手付かずの状態となっていた西参道の修復を支援。他にも、遺跡の発掘・調査・保存計画の推進と周辺のインフラ整備のため地形図の作成にも協力。



7 ベトナム

ハロン湾

広大な湾内に大小さまざまな島や奇岩が浮かび、世界自然遺産にも登録されている。神秘的な光景を間近で見られるクルーズは観光客に人気。

✈️ 首都ハノイまで、直行便で約6時間

環境保全プロジェクト  
近郊の急激な工業化や都市化などによる環境汚染を防ごうと、土地利用施策の策定や、環境モニタリング活動などを実施。



2 ボスニア・ヘルツェゴビナ

スタリ・モスト

古都モスタルのシンボルとなっている橋。紛争中に破壊されたが、それから11年後の2004年に再建され、国内初の世界文化遺産に登録された。

✈️ 首都サラエボまで、イスタンブール経由で約16時間

国際観光コリドー・環境保全プロジェクト  
アドリア海沿岸の観光拠点と国内の拠点をつなぐ「国際観光コリドー」の形成を目指し、官民連携の取り組み体制の構築や観光商品の開発を支援。



3 パレスチナ

ジェリコ

約1万年の歴史を持つ世界最古の都市と言われ、古代の遺跡が数多く存在する。冬でも暖かく、リゾート地としても人気が高い。

✈️ 最寄りのテルアビブ(イスラエル)まで、ヨーロッパ経由で約18時間

官民連携による持続可能な観光振興プロジェクト  
ツアーガイドや料理人の研修、観光情報センターの設置などを支援し、文化遺産の有効活用や観光情報の発信に取り組む。



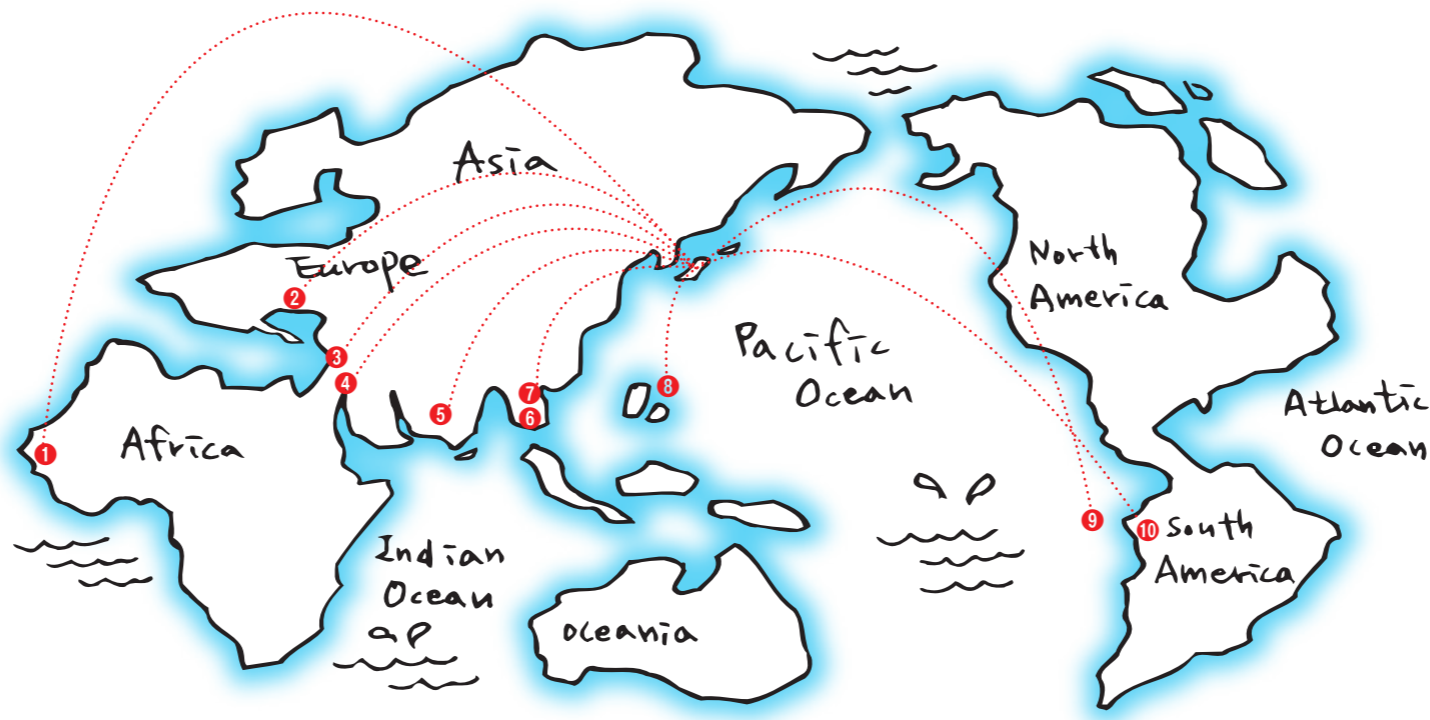
4 ヨルダン

ペトラ遺跡

死海とアカバ湾の間の渓谷にある世界文化遺産。光の加減によって岩の色が何色にも変化して見える美しさは「岩の芸術」とも称される。

✈️ 首都アンマンまで、カタール経由やアラブ首長国連邦経由で約17時間

博物館建設計画  
遺跡の玄関口に博物館を建設し、遺物の保管・展示や、情報の発信を支援。観光客数の増加と、観光客一人当たりの経済効果の増大を目指す。



# 世界の観光に一役！ 日本の協力を紹介



国が誇る世界遺産、人気の観光地、知る人ぞ知る景勝地。実はそこにも日本の協力が隠されている。さあ、世界とのつながりを、知る旅に出掛けてみよう！



特集 観光・世界遺産  
歴史とともに生きていく



8 フィリピン

イフガオの棚田

世界文化遺産に登録されている棚田群。イフガオ族が斜面を開墾して作り上げたその壮大な光景は、「天国への階段」とも称される。

✈️ 首都マニラまで、直行便で約4時間半

持続的発展のための人材養成プログラムの構築支援事業  
若者の農業離れや都市部への流出が増えているため、研修やセミナーを通じて、地域を持続的に発展させる若手人材の養成に協力。



9 エクアドル

ガラパゴス諸島

太平洋に浮かぶ赤道直下の楽園。数多くの固有種が生息する貴重な生態系は、ユネスコ世界遺産の第一号として指定されている。

✈️ バルトラ島まで、アメリカ、エクアドル経由で約30時間

海洋環境保全計画プロジェクト  
ガラパゴス海洋保護区の保全に向けて、海洋調査や水質モニタリングに加え、住民の理解と協力を得るための環境教育などを支援。



10 ベルー

クエラップ遺跡

「第二のマチュピチュ」と呼ばれるアマソナス州の巨大な神殿。周辺には落差771メートルを誇るゴクタ滝などもあり、近年注目を集めている。

✈️ 首都リマまで、アメリカ経由で約21時間

アマソナス州地域開発事業  
観光名所の整備とともに、交通アクセスの悪さやゴミ処理などの問題を解決するため、道路整備や廃棄物処分場の建設にも協力。